



編集・発行  
 日蓮宗 能勢妙見山  
 広報部  
 〒563-0132  
 大阪府豊能郡能勢町野間中  
 電話 072-739-0329  
 FAX 072-739-2883

# 人のために火をともしば 我が前あきらかなり

これは日蓮聖人のお言葉です  
 暗闇の中で火をともしば それが他の人のためであっても  
 結果は自身の前も明るくなる  
 情けは人のためだけでなく必ず自分のためになることです

## 〔12月の主な行事〕

- ★写経会 8日(日) 11時
  - ★清掃の日 15日(日) 11時～12時
  - ★月例祈願法要 15日(日) 13時
  - ★鷓鴣月例祭 22日(日) 15時
- この日にご祈禱を受けた方には  
 火伏せの守り札(鷓鴣様の黒札)を授与します

## 〔1月の行事予定〕

- ☆正月歳始祈禱 1日～15日
  - ※新年の開運シールを授与します
  - ※歳始祈禱申込み受付中です
  - お問合せは寺務所窓口へ
  - ★書き初め写経会 12日(日) 11時
  - ★清掃の日 15日(水) 11時～12時
  - ★月例祈願法要 15日(水) 13時
  - ★鷓鴣月例祭 22日(水) 15時
- 妙見様のご縁日祈願法要 開運殿にて厳修  
 この日にご祈禱を受けた方には  
 火伏せの守り札(鷓鴣様の黒札)を授与します

◎ご祈禱・御回向等のお申込はFAX・メールでも受け付けています

◎写経はご自宅でもできます お問い合わせ下さい

◎送迎バス 奉賛会会員並びに、ご祈禱・回向のためにご参拝の  
 ご信者様の便宜を図り、能勢電鉄妙見口駅から山上まで送迎車を  
 用意しています。ご希望の方は、必ず2日前までに電話で連絡を  
 願います。但しご希望に添えない場合もあります

# お陰おかげの「お陰様」

鈴木春曉

今年も残すところ、あとひと月。

何かとせわしない十二月ですが、そんな時こそ楽しむことも必要ではないでしょうか。

個人的に楽しみな事は駅伝のテレビ中継です。一つの襷に込められた思い。選手、スタッフが一丸となった臨む駅伝。選手の颯爽とした走り、心打たれるのは私だけではないはず。

運営、交通整理、エイドスタッフ：多くのスタッフによる協力があります。選手が気持ちよく走ることが出来る一つの要因にそういった陰なる努力があるのも見逃せません。

ところで皆さまは「ありがとう」の対義語をご存知でしょうか。漢字で書く「有り難う」となります。有ることが難しい。滅多に

ないことという意味になります。転じて稀有な存在に対して使う言葉が「ありがとう」です。

ちなみに、「有難う」の対義語は「当たり前」だそう。

思い返せば、一日三度の食事。ほかほかなお風呂に入る。ふかふかのお布団で寝れること。どれも当たり前と思っていた。それがそうではなかった。と気付けば、自分も誰かのお陰さまになりたい。

と、恩返しをしたくなるのかもかもしれません。

日蓮大聖人は、出家の動機についてご信者様へ宛てて書かれたお手紙『佐渡御勘気抄』の一節に、「本より学文し候ひしことは（中略）恩ある人をたすけんと思ふ」と仰せになられております。お世話になった方がた、我が命を育む全ての存在への深い感謝。そういった存在に対する有難さ

を身に染みて感じておられました。だからこそ十二歳で清澄のお山に登られ、仏教を学び、困っている人を救い恩返しをしたいとお考えになられたのです。

さて、令和六年も残すところ僅か。おれがおれがの「が」を捨てて、おかげおかげの「お陰様」で過ごしたいものです。

感謝の気持ちで今年一年を締めくくり、新たな年をお迎えしたいですね。

## 送迎車のご案内

奉賛会員ならびにご祈禱ご回向にご参拝のご信者様の便宜を図り、能勢電鉄妙見口駅から山上までの送迎車を用意しています。特に正月三ヶ日にはシャトルバスを予定しております。ご希望の方は、必ず二日前までにご連絡願います。但し人数等によりご希望に添えないこともあります。

## 《法華経に学ぶ現代》

～純智庵～

### 當に一心に

もらって嬉しい年賀状  
ただと出さなきや

### 自ら書き

来ませんよ  
年に一度のご挨拶  
心をこめて書きましょう  
年の節目は

### 若しは

### 人をして

### 書かしめん

『普賢菩薩勸発品第二十八』

暮らしのけじめ  
今年の出来事振り返り  
来たる年への  
願いを托し  
幸せメールを送りましょう

## 知識まめ仏教

### 人間（にんげん）

一般にはひとを表し、また人類全体を指す。さらに「人間ができてゐる」など、人柄を表すこともある。

仏教では人びとの間、人びとの住んでいるところ、六道の一つである人間界を指す。

私たちが人間は一人では生きていけない。人と人の間、他と共に互いに支えあっている。共に生きることにより、一人ではできないことを成しとげて、より大きい喜びを味わい幸福感を得ることが出来る。しかし、逆に他と共に生きているが故に悲しみを知り不幸に耐えなくてはならないこともある。つまるところ、私たちの不幸は他との関係において、他との比較によって生じてくるのである。仏は、優劣を競うのではなく、支え合い喜びを分かち合ふことにより、真の幸福を得ることができると教示されている。